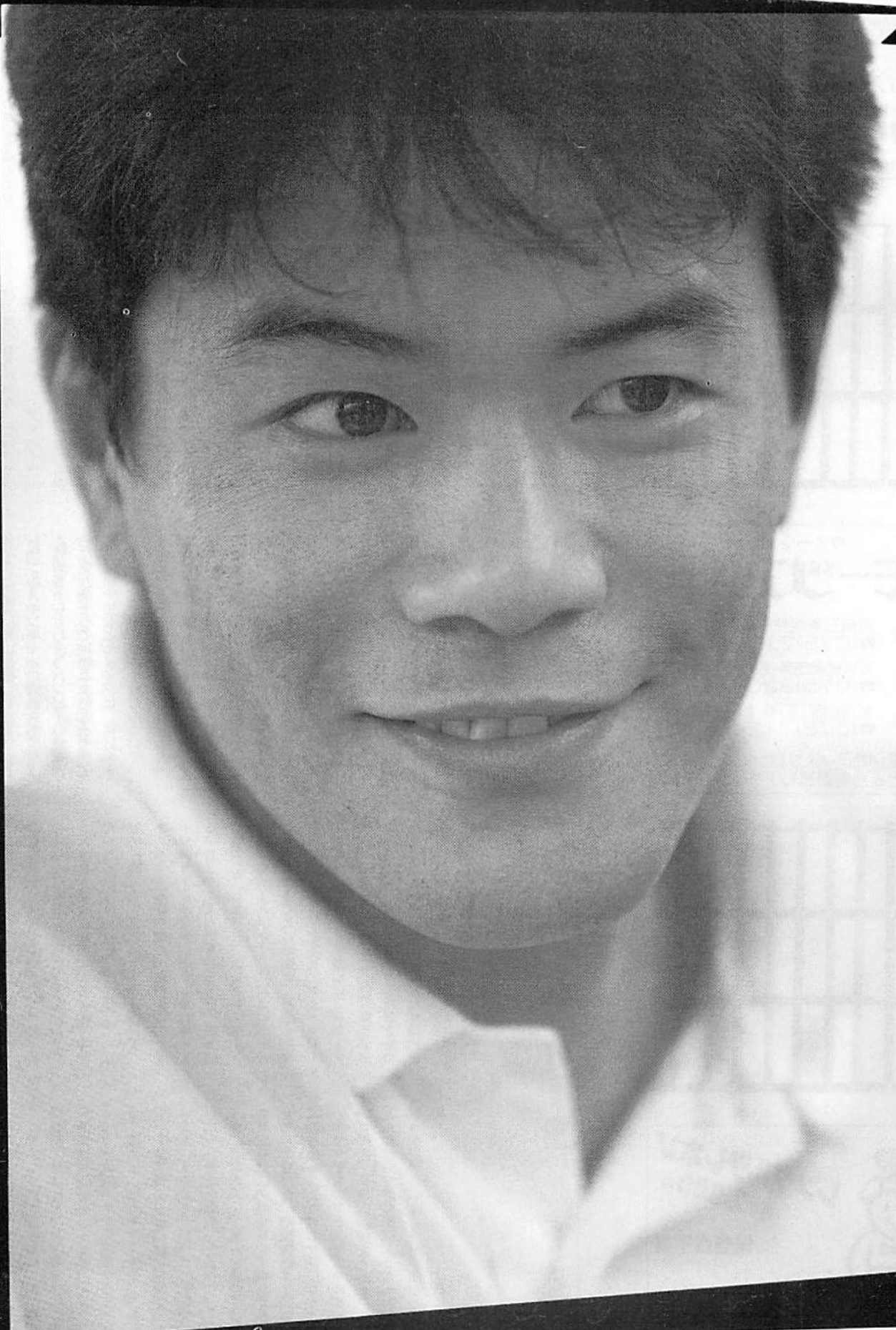
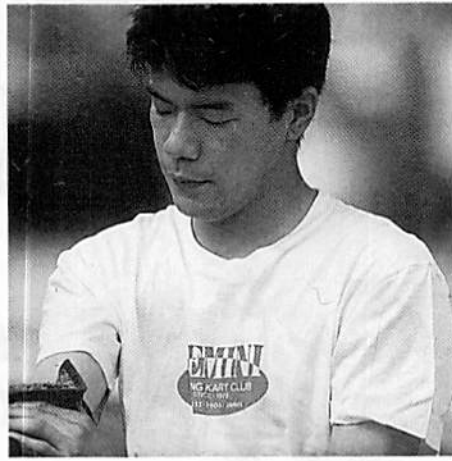


FJ1600前へ



DERECTION SHUHEI NISHIZAKI
TEXT by AKIHIRO KOMIYAMA
PHOTO by SADAHO NAITO



水野昇太選手を応援して下さる
スポンサーを募集しています。

(お問い合わせ先)

PEEK-A-BOO RACING

〒604 京都市中京区竹屋町東楽院西入三本木5-464-1

Tel (075) 255-6202

LAP 5 DESTINY

自分は元来の「勝負」好きと水野はいう。彼の性格もこの言葉が示す通り、勝つが負けるかといった、かなり両極端な部分がある。彼が高校を卒業後に、短大の自動車整備科を選んだのも、実はこの性格が大きく影響している。

当時、将来を考えた彼は、子供の頃から好きなクルマに携わる仕事をすることに決めていた。普通ならクルマに関係した仕事といえば、真つ先にレーサーを考えるものだが、彼はそれとは180度反対の「整備」という道を決めていたのである。

「昔からクルマに携わる仕事といったら、クルマに乗るか、クルマをいじるかしかないと思ってたんです。当時はレーサーのことを全く知らなかったんで、金持ちがレーサーの条件だと思ってたんです。レースはお金がたくさんかかるでしょ。だから、将来を考えたときはレーサーになることなど頭の片隅にもなかったんですよ。それと、もともと子供の頃からレーサーに憧れるより、クルマの中身はどうなってるのが気になるほうでしたから、はじめは真剣に整備士になろうと思っていました。」

当時の彼は、本格的な勝負の世界へ入り込むことよりも、単にクルマが人間をスピードの世界へ導くことにある意味で不思議さを感じ、クルマを早く走らせるメカニクスのほうに興味をもっていたのである。

そしてこの頃の彼は、生まれて初めてクルマを運転したときでもあり、誰でもかかるハシカのように、走り屋まがいの運転をして遊んでいるほうが楽しいかと思っていたのだ。

確かに短大に入ったときは、クルマをいじっているか運転しているか、取り敢えずクルマといられれば楽しかった

です。だから、初めのうちは人のクルマと競い合うことより、友達とつるんで走るほうが面白かった。あの頃はクルマをただ運転しているだけで、すごく嬉しかったんですよ。」

バイト代が入れば、クルマにガソリンを入れて運転し、お金がなければクルマをいじっている。こういった典型的な普通のクルマ好き青年が、当時の彼の姿だった。

だが、クルマが好きな人間は運転が上達してくれば、当然レースまがいの仲間たちもその例外ではなかった。彼のいつていた短大の近くには、レースまがいのことをするには、絶好のスペースとなるダム沿いの道がある。クルマの運転に慣れた彼は、いつの間にか仲間とともに、そこで毎日タイムトライアルやレースを行うようになっていた。

「当時の僕は、みんなに勝つことだけを意識して運転してたんです。性格が負けず嫌いだから。だから、タイムアタックにしろ、レースにしろ誰にも負けなかったんですけど、あるとき友人の一人から「お前、ムチャクチャ速いぞ。」ていわれたんです。友達にこういわれるまでは、「自分は誰にも負けてない」とは思ってたんですけど、「誰よりも速い」とは意識してなかったんですよ。その頃からですね「速さ」を意識したのは。」

彼の中途半端を好まない「勝ち」を求める性格が、このとき潜在能力としてあった。「人よりも速く走れる」という性格を自覚めさせ、彼はスピードへの魅力にとりつかれていくのである。それからの彼は、勝つことに加え、誰よりも速く走ることを意識しながら、

ハンドルを握った。

「この頃からですね。自分次第でクルマは手足にもなるっていう感覚がわかってきたのは。今でも完璧に自分の手足になったとはいえないけど、クルマが自分の体の一部に感じられるようになった頃からなってますよ。」

しかし、問題が起こった。公道でスピードを追及して走れば、必ずついでに「事故」である。「速く走るとは楽しい。しかし、事故は他人に迷惑をかける。どうすればいいんだ。」

彼はこのとき、初めて公道の限界を感じたのである。走る場所を失い落胆味の彼だったが、そんな考え方を一心させるできごとが起こった。

「やっぱり思いっきり走るには、レーサーになるしかないと思ってたんですが、どこか自分の弱気な部分で、『僕が本格的なレーサーなんかになれるわけがない』と思っていたんです。だけどたまたま友人に誘われて、鈴鹿にF1を見に行く機会があって、そこで生まれて初めてF1のマシンをみたんです。その時、自分の中で、オレが乗るのはコレや」と真つ先に思ったんですよ。だから、あのマシンに乗るためにレーサーにならなアカんと。このときに踏ん切りがついたんです。」

普通、F1のマシンをみた第一印象は「凄い」とか「カッコいい」といった単なる抽象的な憧れのイメージが湧くはずである。しかし、彼の場合、「自分の乗るもの」と具体的に感じ、このとき本格的なレーサーになる自覚が生まれたというのである。

そして、この後すぐに彼はカートを開始したのである。彼の年齢からいえばカートは遅すぎるスタートであった。だが、頂点をフォーミュラーとした本

格的なレーサーとなる道を選んだ彼は、あえて基本となるカートから始めることにしたのである。

そしてその2年後、彼はF1へのステップアップのチャンスをもたして、ピーカーレーシングの多と知り合い、今も頂点をめざしているのである。

「今の自分は考えていた方向と違う方向へ来てしまった感じもする。けど、これは運命の流れだと自分では思っているんです。決して楽観してそう思っているんじゃないで、元来勝負が好きで僕の流れだと感じてるんです。確かに難しい流れだとわかってはいるけど、僕は極端な性格ですから、頂点が見えたらそこまていかなきゃ気がすまないんですよ。」

彼が今F1レーサーになれたのもその極端な性格が、彼の別の運命の道を開かせたのである。だが、その極端さだけでは、頂点を狙えない。ここからはすべての流れを見極める安定した眼を、心に自覚めさせられるかがある。その勝負は今始まった。

(つづく)

